

子ども学とは何か(4)

——「梅光子ども学」の可能性——

黒田 敏夫

要 旨

キリスト教主義大学における「梅光子ども学」の可能性について考える。具体的には「キリスト教とヒューマニズム」「キリスト教と教育」「キリスト教と科学」のテーマについて考える。キリスト教宗教哲学の立場から「信仰と理性」のテーマを中心に考えることになる。これらは西洋思想が2000年以上、緊張感をもって取り組んできた問題である。「梅光子ども学」の確立のために必要な考察であり、西洋思想に学びながら考えていく。

キーワード：子ども学，キリスト教，教育，ヒューマニズム，信仰と理性

はじめに

「子ども学とは何か」について、これまで考えてきた。ⁱ それは、子どもの現実、子どもに関して起こる全ての問題を正面から受け止め、それを考えて行こうとする総合的な学問であることを明らかにしながら述べてきた。しかし、それは子どもの現実を観察していくだけのものではなく、子どもの目線から社会を見、そこにある問題を解決し、乗り越えていこうとする主体的なものであることも忘れてはならない。

「子ども学」は心理学や教育学、社会学、生物学、脳科学、哲学、文学など、社会科学や自然科学、人文科学などのあらゆる学問の対象となり、総合的な学問である。私は哲学を学ぶものであるので、哲学的な関心を根本におき、自由な視点と自由な探求方法によって、子ども学の根拠について考えてみたい。特に今回はキリスト教との関係を中心に考えていきたい。

一 章

「私」が考えていく場合、「私」は「梅光学院大学 子ども学部」に所属し、「子ども学」をどのように考えていくかという取り組み方の前提がある。どのような問題に取り組むに場合も、私という人間は、私を規定している歴史的、文化的、社会的、物理的環境の中で、普遍的な課題について探求しているという構造をもつ。このことを自覚していなければ、どのような学問的領域においても本当の意味での客観的、普遍的な問題探求はできないのではないだろうか。それは歴史や生活の座 (Sitz im Leben) も考慮に入れた考察が必要であるということである。更に、梅光学院大学はプロテスタントのキリスト教主義大学であり、建学の精神はキリスト教のメッ

セージのなかにある。従って「梅光子ども学」は、「保育者養成・小学校教員養成」と「キリスト教精神」、「大学教育」という普遍的な理念の下で考えられなければならない。とりわけ、一般の大学との違いは、この「キリスト教精神」と向かいあっていることである。

西洋教育思想の歴史を見てもわかるように、キリスト教と教育思想はキリスト教教育という言葉があるように対立する思想ではないが、事柄によっては、緊張関係をもってきた歴史がある。その一つはキリスト教と狭義のヒューマニズム（人間中心主義）の緊張関係である。教育思想はヒューマニズムの思想を前提にしているとも言える。例えば、アリストテレス流の生物的生成観がそれであり、人間は、自らの内に成長の根拠を持ちながら、つまり可能態（*dynamis*）から現実態（*energeia*）・完全態（*entelecheia*）へと生成していくという生成と成長についての教育観である。与えられた環境の中で、人間はどこまでも完成された人間へと成長するものであると考えられている。

キリスト教とヒューマニズムの対立は、16世紀のキリスト教を見ると、キリスト教信仰とキリスト教的ヒューマニズムの対立として論議されている。その代表的な論争の一つは宗教改革の発端を作ったルターの言葉にみられる。ルターは、自分が修道院に入るときの自分の課題は「いかにして恵みの神を獲得するか」であったが、自分はこの問いの前に、いつも神の恵みを獲得したという確信は得られなかった、と回想している。この彼の苦しみが超えられるのは宗教改革的認識に至る一歩となる1514年の秋の一つの理解だと言われる。つまり、人間は神の要求に答え、それを満たすことによって神の恵みを獲得するのではなく、神の義を恵みの賜物として受けて、義しい者に造りかえられるという理解に達したときであった。ⁱⁱ そしてルターはついに宗教改革的認識に至るのである。ローマ書1:17の「神の義はその福音の中に啓示され」「信仰による義人は生きる」という言葉を、「神はその義により憐れみをもって信仰により私たちを義としたもう」ⁱⁱⁱ と理解したのである。

この問題はエラスムスとの「自由意志論争」の内容とも深く関わっている。ルターは「奴隸的意志」でエラスムスが、「自由意志を、そういう力によって人間が永遠の救いへと導くような事柄へ自分自身を適応させたり、あるいはそのようなものから身をひるがえしたりしうる、人間の意志の力と考えている」^{iv} と述べる。しかし、ルターはこのような「自由意志」は人間には備わっていない、人間の本性は「盲目」であると考えた。ただ神の恵みによってのみ、人間は救われると考えるのである。

ルターのキリスト教信仰論は、パウロ、アウグスチヌスの信仰論に立つものであり、正統派キリスト教信仰の立場である。ルターは救いに関して、力ありとする人間至上主義としてのヒューマニズムを徹底的に批判する。しかし、現代のヒューマニズムの多くは、救いの問題に触れることはなく、人間を相対的・有限的な存在、宇宙の中の小さな存在と考えるものである。全てのヒューマニズムが人間を傲慢な存在に至らしめる人間至上主義であると考えるのは無理であろう。そのような意味で、現代のヒューマニズムをルターのように批判することはできない。

ところで、教育思想を見てみると、教育はある意味で完成された人間像を掲げ、それに向けての教育を目指すものである。人間の心と身体の発達と成長の理論を基礎に教育論が展開される

と言える。また、その成長の目的は机上の理念ではなく、実現可能なものでないと意味がない。このような意味で教育は多くの部分がヒューマンイズムの思想に与すると考えられる。

キリスト教とヒューマンイズム、キリスト教と教育思想の課題は、西洋思想においては、「神学と哲学」、「信仰と理性」、「自由意志論」などの論争を経験しているので、大きな偏見もなく取り扱われている。しかし、このような議論の経験がない日本のキリスト教の教派においては、教育思想や教育科学、ヒューマンイズムに対する理解は十分でない。加えてキリスト教から教育に対する批判は、進化論や科学に及んでいる。逆に宗教的視点がなければ、教育における道徳や宗教の意味や意義が積極的な意味を持ちにくいということも言えよう。「梅光子ども学」はこのことを念頭におきながら、キリスト教と教育の関わりの積極的な意味を求めていかなければならない。

二 章

人間の心と身体の発達の原理はさまざまな科学の研究の成果によって明らかになってきた。教育と科学は密接な関係にあると言える。キリスト教と教育の関係を考えていくからには、科学との関係について、思想として、考え方として整理しておく必要がある。科学の諸分野において、キリスト教思想との関係を論じることはここではしないが、大きな視点から、キリスト教思想と科学思想の関係を考えてみたい。この課題も西洋思想の中での歴史は長い。神話的思考を反省することから哲学が誕生したのであるが、mythos (ミュトス) と logos (ロゴス) の関係、心(魂)における霊・理性・欲望の構造、信と知、信仰と科学などの問題として真剣に論争されてきた。現代では、1960年代ごろから、このことは真剣に議論されてきた。統一協会のマインドコントロールやオーム真理教のカルト教団の問題が忘れられてきているのであろうか、最近では若者たちの間に、スピリティアリズムと称される霊性や霊や魂の存在を、安易に語り信じていく風潮が広がっている。物事を論理的に、また理性的に吟味し、反省していく姿勢が失われているのである。子どものころから占いを信じ、血液型による性格判断を信じるのも似た傾向があるのかも知れない。論理的に語り得ないものに、人間はどのように関わり考えていくべきかを、真剣に考える機会がないまま成長しているのである。幼児教育における想像力の形成の仕方に問題があるのかもしれない。また、似非科学やそれを題材にしたマスコミの影響によるところも大きいかもしれない。宗教教育においても一般教育においても、想像力の形成、論理的批判力の育成、価値観の形成は大きな課題である。

キリスト教主義大学において、教える側が宗教と科学の課題を真摯に受け止め、高い見識と良識をもっておくことは重要なことである。日本では、有名な自然科学者が仏教徒であることや老子の思想に関心を持っているということは、よくあることである。それは仏教の宇宙観と科学者の自然観が矛盾せず、調和するかのように見えるからであろう。ブッダの根本思想の一つである「如実知見」は、われわれの現実存在をあるがままに智慧をもって観察することを意味する。あるがままの己や世界の在り方を知ることが悟ることである。この姿勢はありのままの事実を観察し、ありのままの事実の在り方を説明する法則を求める科学者の姿勢と共通するのである。この

点で、キリスト教の創造説は特に日本の科学者にとっては理解し難いものであろう。また、聖書の記述をそのまま信じたいと思うキリスト者にとっては、人間がサルから進化したという説は聖書の創造説にとっては受け入れがたいところがあるのであろう。これらは「信仰と自然科学」の問題ということになるが、以下、ワイツェッカー、シュリンク著「信仰と自然科学との対話」^vによって、「自然科学的宇宙論と創造説」、「相補性の概念」を中心に考えて見よう。このことは、子どもの教育において、「人間とは何か」、「宗教とは何か」、「科学とは何か」を考えていくことになる。つまり人間の存在と認識、キリスト教信仰が求めるもの、科学的思考が求めているものを明らかにしていくことになる。幼児期は自分と世界の存在そのものを、フィルターをとおさないで、そのままの姿で受容する。この時期に育まれる人間性、科学性、道徳性、宗教性の基礎はその後の成長にとって大きな意味をもつものである。このような意味で科学と道徳・宗教の問題は、並列的な二つの次元として、取り扱うのではなく、それらの関連性を全体として考察していく必要がある。これらは教育や心理学だけではなく哲学や宗教哲学の課題でもある。

ワイツェッカーは次のように述べる。「われわれは、まず次のような自然科学的事実を理解している。地質学と天文学は、今日の確かな結果から、過去を忠実にさかのぼることによって、地上に生命が発展した過程、地球の歴史を明らかにしている。それらはまた、星の生成についても多少の解明を与え、物質界の歴史を四〇ないし五〇億年前の時代までは、完全にさかのぼらせるのである。」^{vi} 現代の自然科学は、世界がまさに一つの時間的起源をもつこと（創造）を明らかにしたかのように見える。そして、その後の時間系列のなかで、生物が進化していく過程を明らかにしている。この二つのことについて、自然科学は旧約聖書の文字から算定した約六〇〇〇年前の天地創造の出来事の年数を覆したが、創造説を認めたと考えてはならない。これらの議論は共に誤ったものである。「創造という概念の神学的重要性は、世界の時間的起源にあるのではなく、神が根源的なものであるということ、すなわち神学が厳密に表現しているように、神が世界の創造者であるということにある。」^{vii} 「アウグスチヌスによれば、神は世界と共に時間を創造したのであって、時間の中で世界を創造したのではない。私の知る限りでは、トマスにとって、時間的な世界の創造は『自然の光』（理性）からは推論されない啓示の真理である」^{viii} と述べる。

整理してみると、次の事柄が確認できるであろう。1. 自然科学が世界の時間的起源を明らかにしたとしても、それを聖書の創造説と関係させてはならない。2. 自然科学は世界の時間的起源がどのようなあり方であるか（How）を記述しているのである。それに対し聖書は世界の時間的起源、つまり創造について、その根源・意味（What）について語るもので、互いに対立する考えではない。3. 世界の形成の過程について、自然科学は進化説として記述し、その意味については語らない。それに対して聖書は、その意味について語るものである。私たちは、子どもたちの教育の場において、科学的真理とキリスト教（聖書）が語る人間と世界の創造の意味について正しく理解し、子どもたちの論理的能力と宗教的情緒の育成に努めていかなければならない。

三 章

西洋思想史を振り返ってみると、ギリシャ思想とキリスト教思想の対立と止揚の歴史を見ることが出来る。そこには、理性と恩寵、科学とキリスト教、ヒューマニズムとキリスト教の緊張した関係と論争の経験がある。自然科学（自然哲学）と宗教や哲学は、神・人・世界観において、互いに大きな影響を与えてきた。例えばアリストテレス哲学は生物学から、スコラ哲学はアリストテレス哲学から、そしてカント哲学はニュートン力学から大きな影響を受けた。西洋思想やキリスト教思想は、東洋思想と違い、自らを体系化と論理化するなかで、科学や数学、論理学と緊張した関係で向き合い成長して来た。もちろん、西洋の歴史の中でキリスト教会は、魔女裁判にみられるように、教義に反するとみなした思想や科学を排除するという歴史的な大きな過ちも残している。二〇世紀になり、現代の科学と現代の神学との思考形式の関連（類似性）について真剣に議論された。一つは量子力学の「相補性の原理」（1927）がそれである。以下、ワイツゼッカーの説明を要約して見よう。この概念はデンマークの物理学者ニールス・ボーア（1885-1962）に由来する。光は波なのか、粒子なのかという、光の波動説と粒子説の問題である。写真の感光板には、一個の粒子が当たったとしか説明がつかない黒点が見られる。しかし、黒点の確率分布を考察すると、粒子では起こりえない干渉をもたらす波動場の法則に支配されているというものである。ボーアは相補性の例を次のようにいくつか挙げている。「第一に、両現象は互いに排他的である。粒子として現れるものは、同時に波動としては現れないし、波動として現れるものは同時に粒子としては現れない。けれども第二に、この二つの現象形態は、完全性という意味では、互いに他を要求し合う。」「このような意味で現象自体は互いに相補的である。」^{ix} このような量子力学における新たな思考法はキリスト教神学や哲学などにも大きな示唆を与えたのである。

他の例も挙げている。「概念の直接の応用と、その意味の分析との間の相補性について」、「われわれが一般に、非常に多くの概念を、あまり分析しないで用い、次に必要の生ずるたびにそのつどそれを厳密にするものであることを指摘している」、「われわれは、どういう概念を分析し、またどういう概念を分析せずに用いるか、を選択する」^x ということにおいて見ている。

更に「愛と（正）義との相補性」について、「私は、一人の人間をほかの人たちと同等に正しく律しようとするならば、かれを完全に愛することはできないし、またかれを無条件に愛するならば、かれを正しく律することはできない」^{xi} というボーアの言葉を彼は紹介している。これらの相補性の概念は哲学的にも神学的にも重要なものである。私たちが、具体的な現実を説明する際に、深い考察をさせてくれる概念である。ワイツゼッカーによると、ボーアは相補性の概念を量子力学において説明する前から、この概念を他の領域において、いろいろと例をあげていたということである。科学的な概念と思われても、実は歴史的な概念であり、思想の影響のもとに生まれたということである。

「子ども学は如何にあるべきか (How)」を考えるとときに、「子ども学とは何か (What)」という問いが常に根底になければならない。「梅光子ども学」を考えると、「何か」という問いが、キリスト教が教育や科学にどのように関係しているかを明らかにする。それがなければ「梅光子ども学」は「学」として展開していかないとされる。

注

- i 子ども未来学研究 第1号、子ども未来学研究 第2号、子ども未来学研究 第3号
- ii 徳善義和「ルター」平凡社 世界の思想5 1976.12.15 10頁
- iii 同上 35頁
- iv ルター「奴隸的意志」中央公論社世界の名著 1969.10.25 193頁
- v ワイツゼッカー、シュリンク「信仰と自然科学との対話」新教出版社 1963年
- vi 同上 8頁
- vii 同上 10頁
- viii 同上 10頁
- ix 同上 17頁
- x 同上 18-19頁
- xi 同上 20頁